

軍用記

四

和書門			
七	一七八	一七八	一七八
冊	架	函	號
類	類	類	類

内閣文庫			
一五	一七八	一七八	一七八
四	七	七	七
函	冊	冊	冊
架	架	架	架
類	類	類	類

内閣文庫			
番號	和	17280	
冊數	7 (4)		
函號	154	3	

武備兵法



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

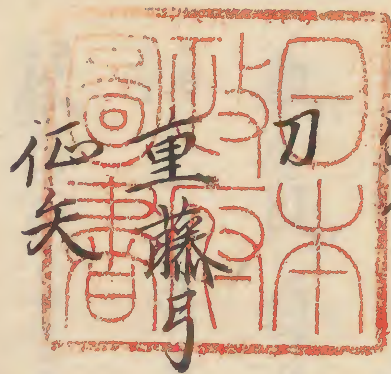
軍用記

才四

目錄

太刀

弦袋



滴矢

弓袋

此田山並原兩流

袋皮

付引表

尻鞘

火打袋

折刀

塗籠藤弓

光矢

箆

鞞

此田山並原兩流

床机

付木板

淺草文庫

軍用記 才口

才口の事

一 軍陣より系巻の才口を常せしむ柄系源氏と志平氏の業
 後尾氏と源氏と橋氏の業と用多し物色ともなれりか
 何とぞ用多しと云ふ所の如くも信じてる系平相と云ふ又
 琴の系巻も巻ん又さうり巻も何と云ふの系又兵庫録に
作すも
 一金具の地を系巻網中とあることを打屋と云ふ金具して金具を
 の故を付も又ある故の如くも好ぶまうす
 一 子とが稱すくむと云ふは係巻物と云ふは其の事あり

一 刺しと金りのを紋お皆一様の何なり

一 柄糸の下柄と金りん糸を巻つて大將軍の錦を巻く

一 圓貫の形家の紋又は何れも好まぬをて目貫の表裏も

方同し通りよ折へ目貫の志んとあつて別目打少用を

煙さくさくより折へき表の目貫の目貫完をわらひさうを

一 袴の菱鏡へ金帯を是れ何なりと布銅へ

一 大せつらに紋の袴より少少形は鏡は形は毛布銅あか

二 玉打籠の紋又は何れもちりし付る紋は今を後編を

一 小せつらに目貫の金帯の浪波を巻つて

ハカサ少つと糸同し厚サハ小巻つてと高振を誂たる程の厚サ

巾とせつらに豊巾あか厚巾とけつらにふとと菊紋の如く

このを替へてさうらせつらに金浪のむせつらにの目貫をぬき

一 さらう巻の巻糸のりも柄と目しと金りん錦をあて巻也

一 菊紋のりも他又黒巾又赤巾又白のり巻をきせ

つむも好まぬを

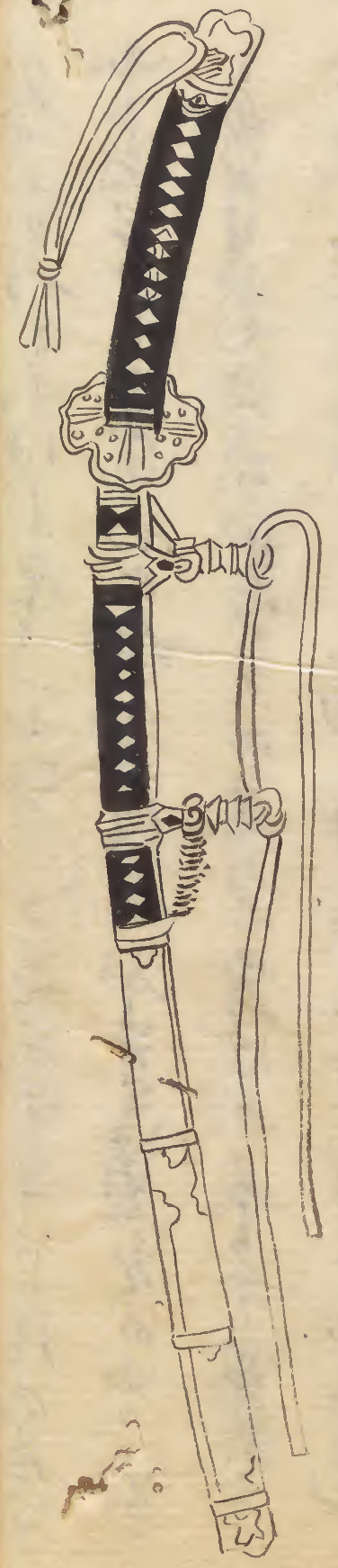
一 さや代巻乃及將軍の法を帯の何れもさや代巻のりもさや代巻

綿糸よりあつてよりきせとて纏々むし鹿柄のりも

一 かいさうのうたゝ又つちあり又の布何れも

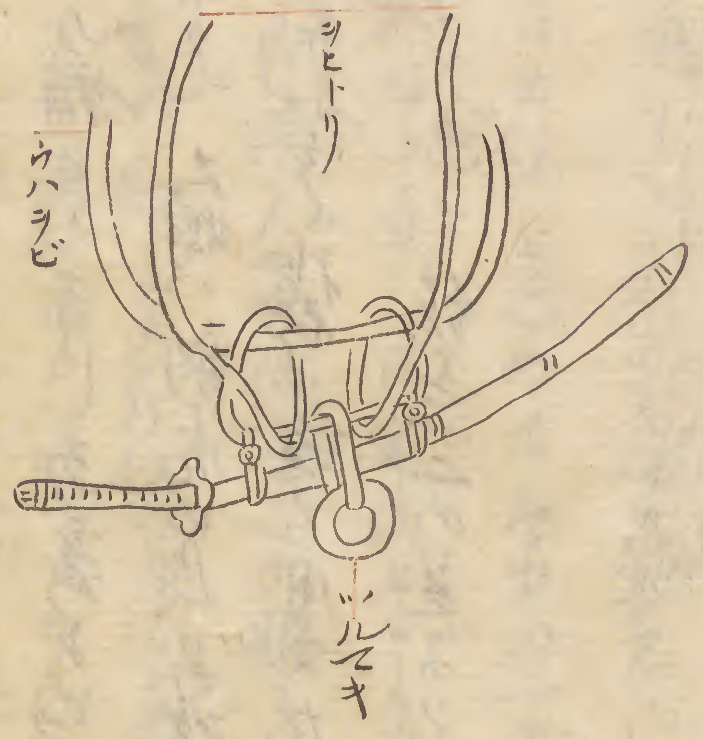
て利こ又喉木の紐をも利將軍あつかひあつ又織物の布も

用らきしんかんたしも唐より織る鐵物の名
 一 ち力の寸尺の定法ありし人の力量よりして長も短も何
 つし我力量よりし短と用る古法
 一 してぬきのこと藍草又馬草を細くして用へ物縁の
 のあ方の透る通く物縁をくすも鉄とすよき程の
 不出る刀の巾鉄むきあふ一方の一鉄余り守斗残し



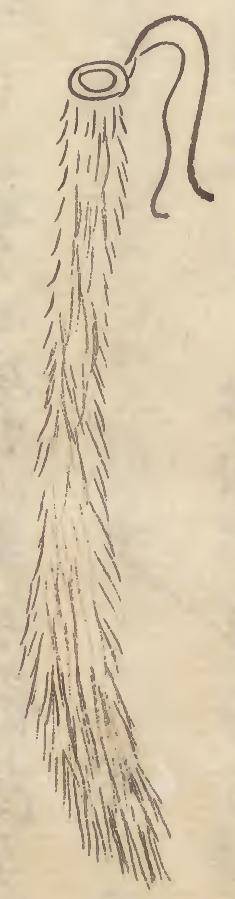
ち力をせし振舞うるをあ方とし小遣の舞の事とす
 一 通しは物と名するにやしてこの是の方なるは
 是の方の前(旦)して名振る鉄を余りし言すのこく銀
 おしひ(お)しと名すち力の是るの品ありしや名するあり
 刀を付る

上帯ツニをまはし
 かりにんすヒテ太刀
 ラツケカヲラシ後
 ラ負テは能シノ
 直ス



尻鞘シシヤの事見ハち方の鞘見あつし毎家あつちきハち方の又
 さ初め枚尻鞘と見えし馬の豹虎の皮其次ハ熊の皮麻
 の皮を七月一し尻弁ふくく代る紐て用へたるを帯しと
 指し名はきの方より入連て紐とハ二の足よりけ紐し

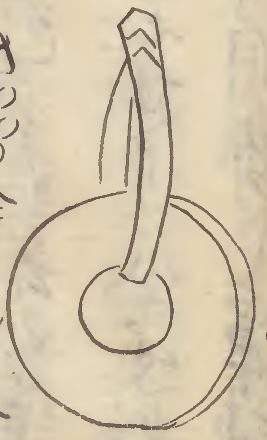
尻鞘



一 弦袋の事のおいしうり付らる丸く草を以て塔の形と云ふ
 一と見らる紐と云ふ丸き穴ありて各々斗の細き草と通
 へぬ紐之主編つあつらうと通らるる足付也

びるニツルヲ巻

弦袋

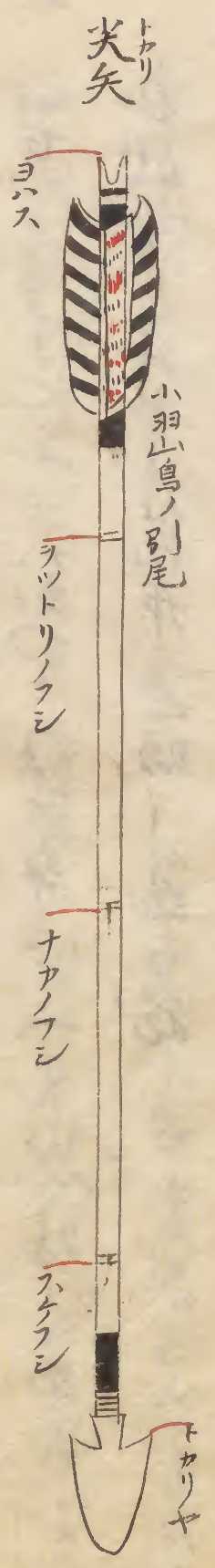


徑五寸斗

弦袋といふハちき名ハ紐ハ紐巻
 ともいひちりしうり代ハ紐袋と
 して紐を以て紐い作らぬ事あり
 あり紐袋といハ紐巻のこと

一 火打袋の事 是もち方付らる織物を丸く徑七寸ありて
 法を以て紐と通すし火打の處ある火口を入る又
 茶を以て入つし口の紐と志めてち方の一の是の根あり
 付つしち方の火打袋付らる事ハ日也武をより始る日也
 哉東夷退治の時伊達大倭姫命(西照といふ事ありし
 時天倭姫命 天叢雲の御子火打袋付て集りてしれ
 とし傳ふ事) 帯りし火打袋と紐カサ巻を付て殿中又ハ式正の儀ハ
 口は火打袋付らる事あり 四祀といふ事あり

之也羽ハ有るの羽ハ少羽ハ山鳥の尾也少羽をともくくをまて
 之哉すあり羽中出てをむるハ

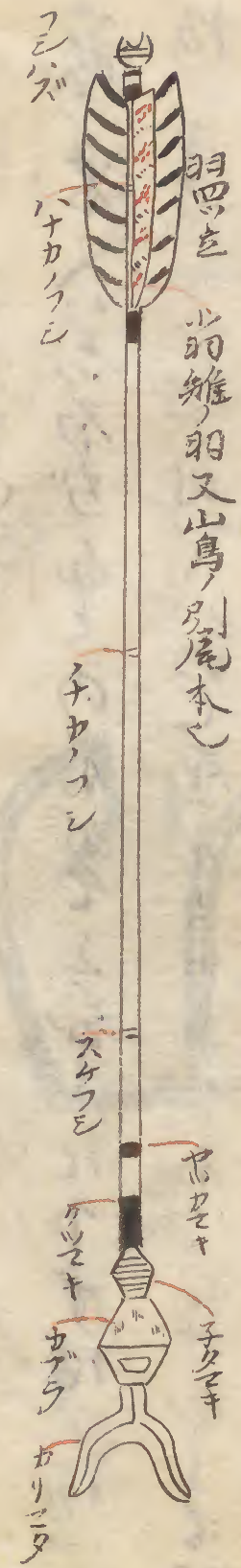


一 矢斂尾をりり矢の音と後をいひやうはを射とるこ
 ますくたぬひやうは山鳥の尾

一 羽ハ有るの羽ハ少羽ハ山鳥の尾也少羽をともくくをまて

さハ一もするのこひ鏡中も此も是ハ畧義に管ハやう管ハこ一
 まさしうらうをたむえ羽ハ有る羽ハ少羽ハ山鳥の尾也少羽をともくくをまて
 射とる矢の音と後をいひやうはを射とるこ
 ますくたぬひやうは山鳥の尾

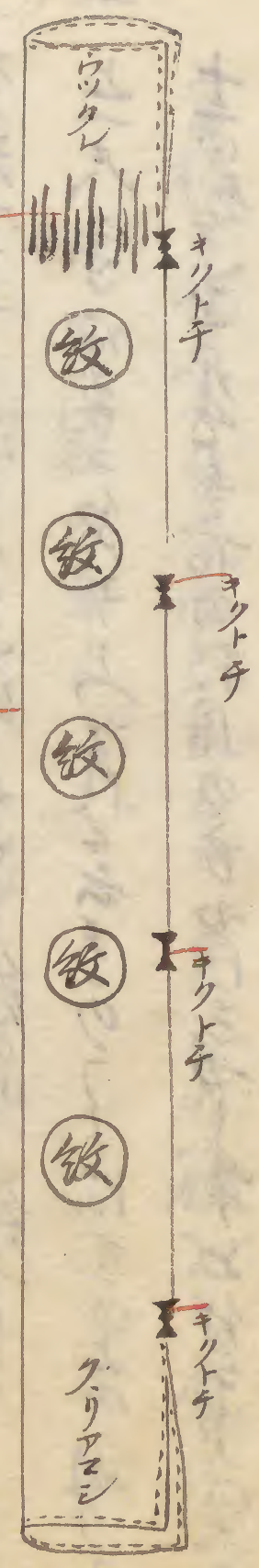
一 羽ハ有るの羽ハ少羽ハ山鳥の尾也少羽をともくくをまて
 らあやまあこをまけるこはまきこはゆき花ハツおせよりハ
 長ク巻多う巻之形ハ靴子の形之中より多ク先の音ハ花
 少羽ハ山鳥の尾也少羽をともくくをまて



一 羽ハ有るの羽ハ少羽ハ山鳥の尾也少羽をともくくをまて
 之哉すあり羽中出てをむるハ

入を完一「字」をせらせしを二番斗の黒草を袋の折めの
 ちうのうらばすの上の通り「ゆい」付き

一 きつとちハよりのおろそろそを「の」とまり一「中」に「ゆい」ぬひの
 おとち付き

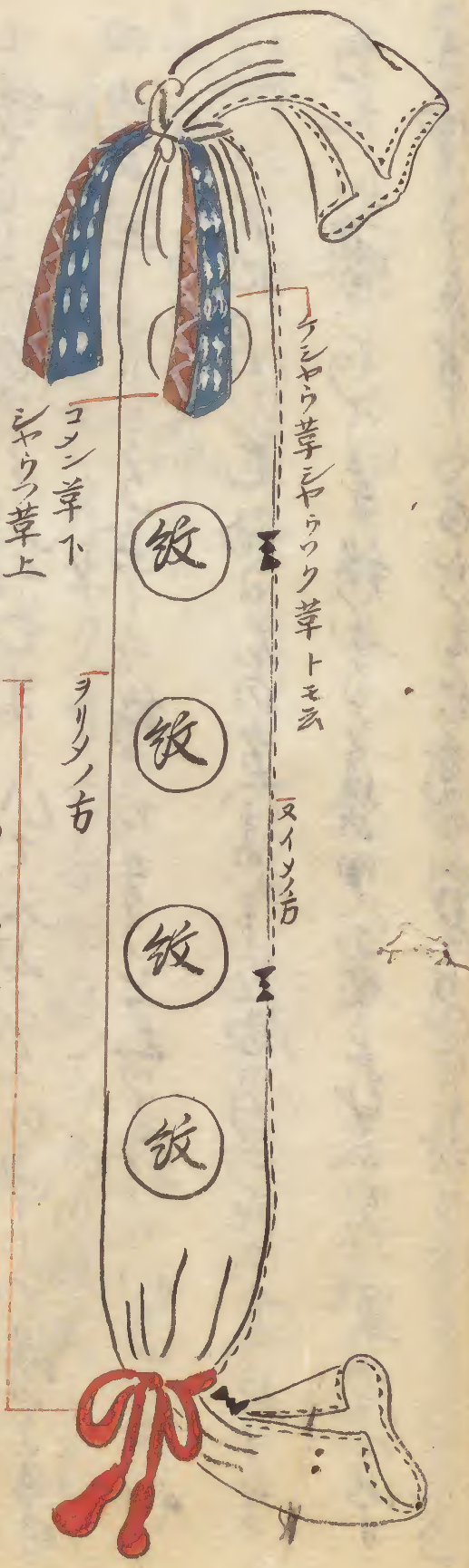


一方ヒタツトル一古ヒダツツ 折目ノ方
 両方ニテナヒダツコニケヤウ草付ル

袋ノ草ノ裏ナシ

けき草を付けらを入りまをりしる形たのこし

装束草 小笠原ハコニ草ト名ラフ草上
 武田ハコニ草下ノ草上



小笠原流ハ切御の所ヲル組銘中ケシヤウ草ト名ラフ草上
 組銘ニテ銘ハスニテ袋ヲ引シコキテ一ムスビ銘ヲ名ニ
 但軍陣ノ時大將ノ張ガヘヲ入タルヲハ黒草ニテ銘ヒテ
 持スヘシ

鞆の事

一 ゆいニ「ゆい」を「ま」き草の事ハ「紀」草又何も「ゆい」を「ゆい」の
 草ハ別の草中「指」を「ゆい」も「ゆい」之又「麻」の「九」の草ハ「ゆい」
 由「ゆい」の「指」を別の草中「ゆい」も「ゆい」之

統も別の章に記さるる界を記す

一 由りけの日の甲子家の紋付らるる常典ありき事軍陣の由り
もあつた付る

一 由りけの日の甲子家の紋付らるる常典ありき事軍陣の由り

一 軍陣の由りけの日の甲子家の紋付らるる常典ありき事軍陣の由り

一 軍陣の由りけの日の甲子家の紋付らるる常典ありき事軍陣の由り

一 軍陣の由りけの日の甲子家の紋付らるる常典ありき事軍陣の由り

一 軍陣の由りけの日の甲子家の紋付らるる常典ありき事軍陣の由り

一 軍陣の由りけの日の甲子家の紋付らるる常典ありき事軍陣の由り

一 軍陣の由りけの日の甲子家の紋付らるる常典ありき事軍陣の由り

一 軍陣の由りけの日の甲子家の紋付らるる常典ありき事軍陣の由り

一 軍陣の由りけの日の甲子家の紋付らるる常典ありき事軍陣の由り

一 軍陣の由りけの日の甲子家の紋付らるる常典ありき事軍陣の由り

武田と北条の事元来北条の事ありて馬の故実あり

つらつらありてお遠ありて大進お高矢の矢は法の事

事なほあるては遠ありては知は遠なる事ありては

の光遠ありては遠ありては知は遠なる事ありては

あはゆる事ありては遠ありては知は遠なる事ありては

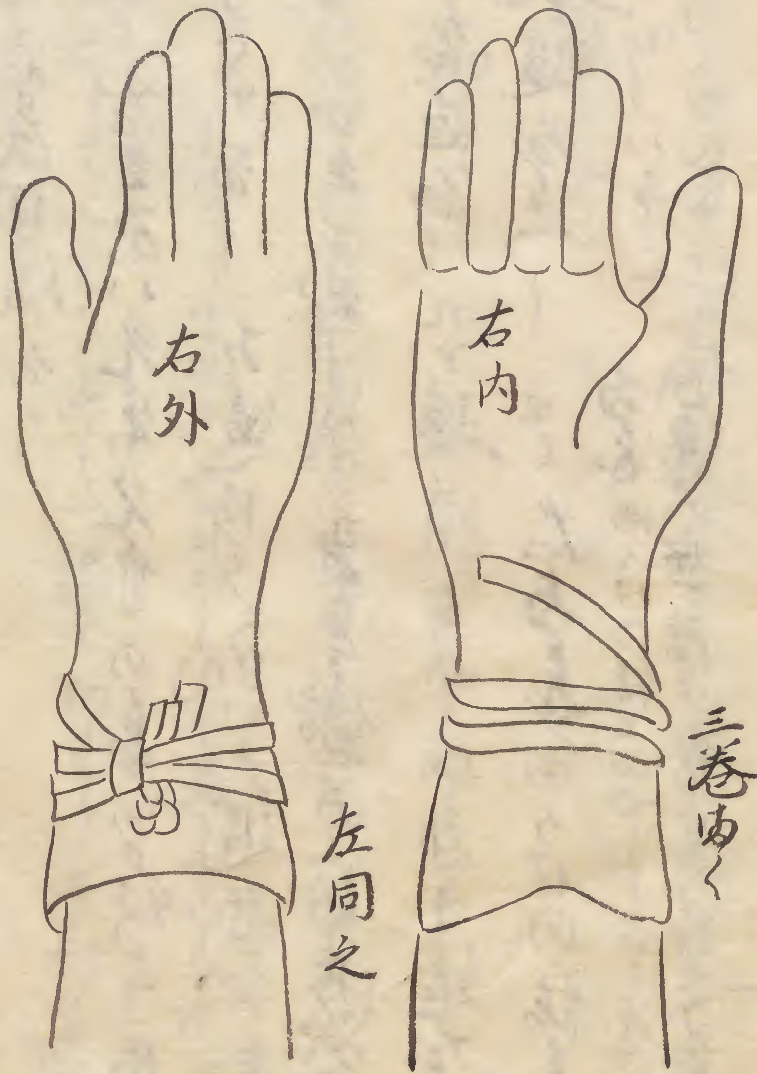
は条に軍陣の由りけの日の甲子家の紋付らるる常典ありき事軍陣の由り

は条に軍陣の由りけの日の甲子家の紋付らるる常典ありき事軍陣の由り

は条に軍陣の由りけの日の甲子家の紋付らるる常典ありき事軍陣の由り

は条に軍陣の由りけの日の甲子家の紋付らるる常典ありき事軍陣の由り

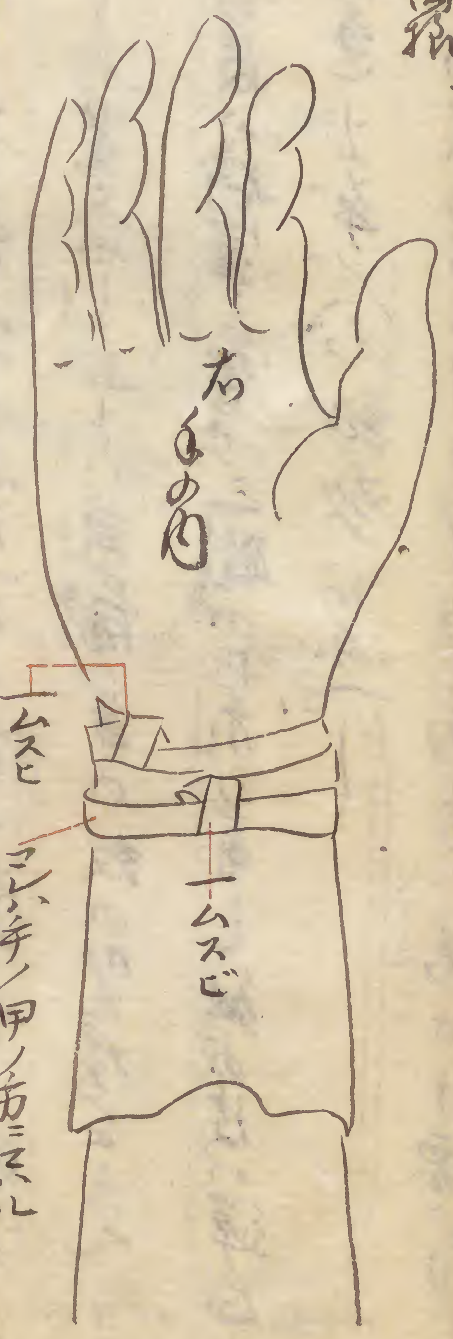
鞆緒留振 武田家



左同之

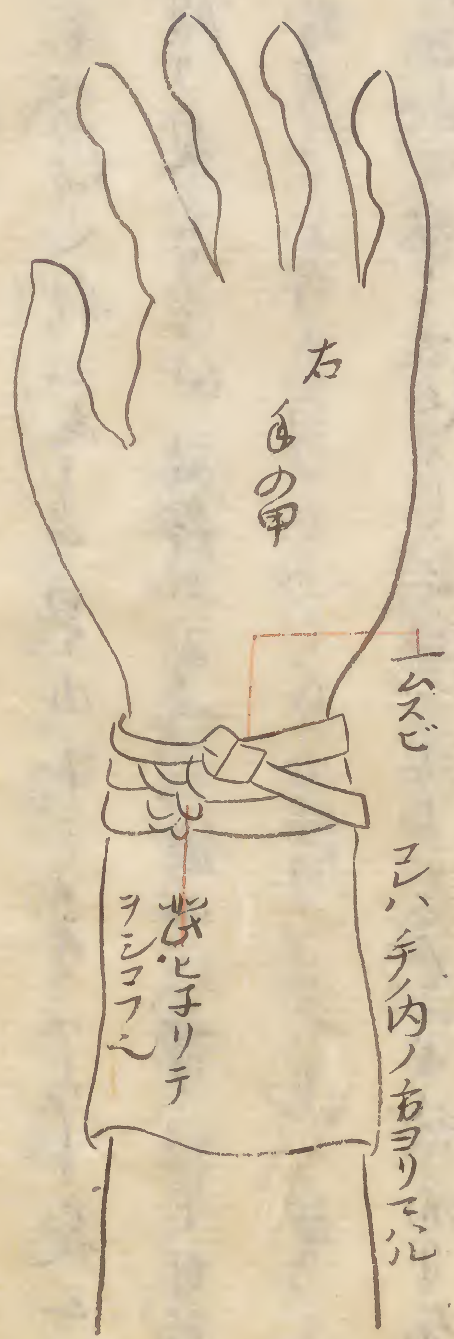
緒ノケテリヲニツニ打カケテヒナリ
テハサニニ無之

鞆緒留振 小笠原家



コレ、チノ甲ノ方ニスル

軍陣



コレ、チノ内ノ方ヨリスル

左エカケモ唯之知也

此ヒナリテ
ヲシヨフ

床机之事

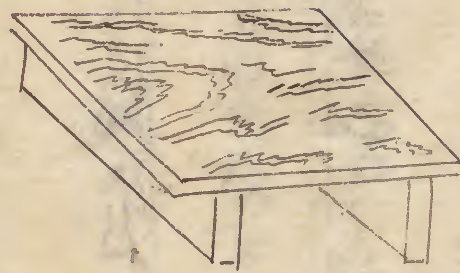
一軍陳のその床机の長さ一尺八寸
 一打板の寸法は、敷皮の長を従ひて表に二尺五寸を
 打し、寸五分を寸五分とし、寸五分とし

夏床机



全幅打す
 但し

打板



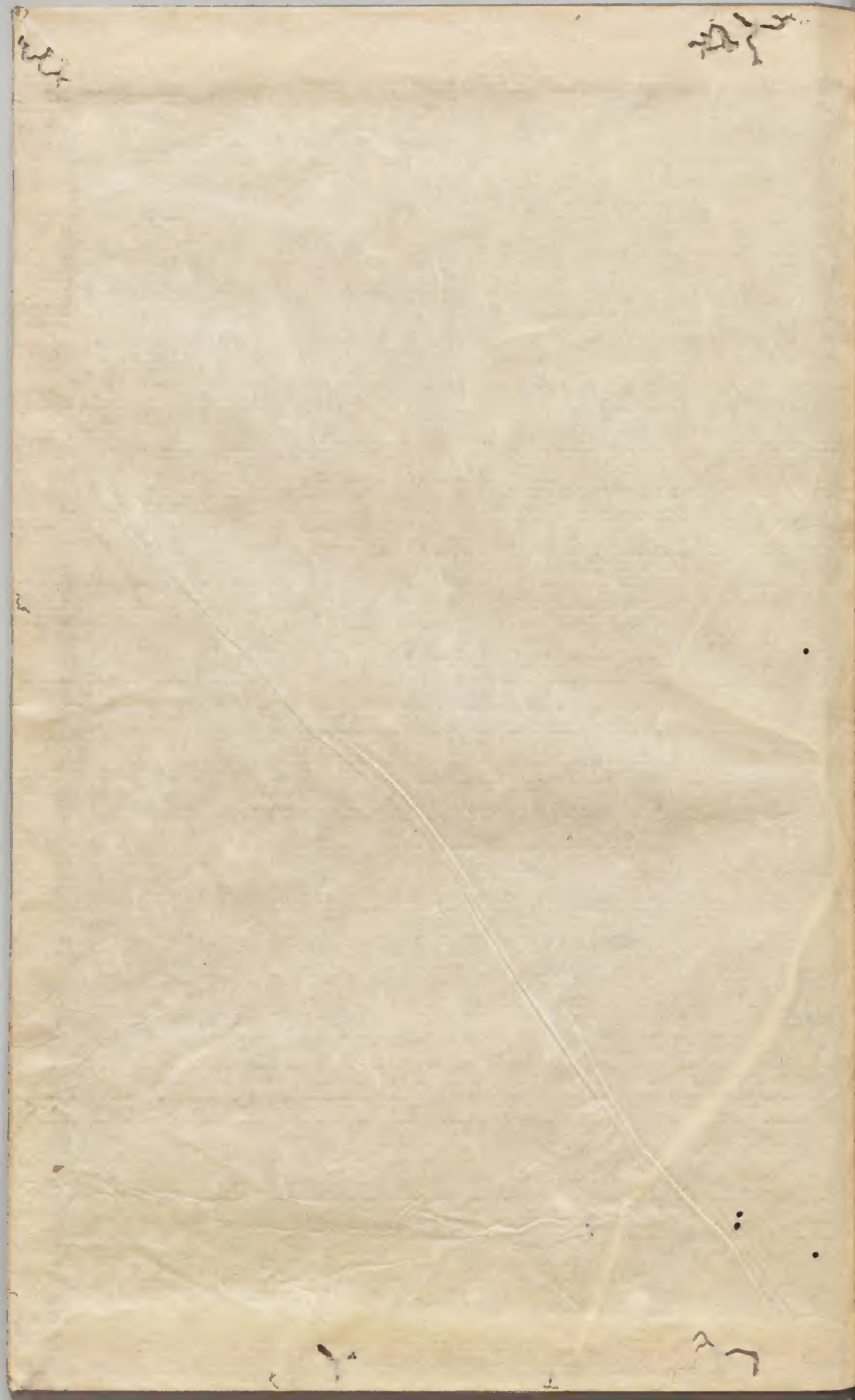
床机之面



寸五分を寸五分とし、寸五分とし

是れ其の床机の形と
 打す板床と云ふ形は、
 但し、板机と云ふは、
 其の形と云ふは、

甲冑と云ふは、甲冑と云ふは、
 櫃と云ふは、



11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100

